
点

古都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

点

【Zマーク】

Z5569M

【作者名】

古都

【あらすじ】

夢を見ている時に、今夢だと分かるときがある。

そして、そこから始まる夢の世界。

夢の最後。

(前書き)

血身もよく分かつておらず体裁を成していないかもしれません
が、つよいじくを願いします。

—

誰でも一度は体験したことがあるのではないでしょうか。 「あ、今夢を見ているぞ」ということが分かる瞬間を。 例えば、見るからに現実的にあり得ない状況に遭遇しただとか、現実味がある割にどこか意識にフワフワしたような浮遊感を感じただとか。 理由は様々にあることだと思います。 ただ、そのどれもに共通して、普段とは違う何か異常を感じることが夢だと気づく第1歩なのではないでしょうか。 そして今、私もまた、その第1歩を踏み始めたのでした。

学校から自宅へ帰る夢を見ていた時のことです。 夢を、とは申しますが、それは今から考えると夢だったという話のことです、その時点での私は未だ現実の出来事だと認識しておりました。 ですので現実の様に、いつも通学路として使っている、歩道もなく多少上り傾斜があるものの車通りも少なく自然に挟まれた道路を、いつものように前方遠くにある縁豊かな山々眺めながら、疲れた足取りで自宅を目指していたのです。

そんな日常に沿つて行動しているようで、そのうちに私は、一つおかしなことに気づきました。 ずっと眺めていた山々の風景が、随分歩みを進めたのにも関わらず、先ほどからほとんど動いていないような気がするのです。 初めのうちは、遠くに、しかも前方にあるものだから動いて無いように見えているだけだと思い込み気にせず歩みを進めましたが、自身の近傍の風景は流れしていくのに、やはりどうも遠くの風景は微動だにしていいように思えます。 そこで私は、走つたり跳ねてみると風景が変わるかどうかを確認してみることにしました。 走ればそれだけ風景が早く大きく動くことになりますし、跳ねることに至つては、風景の見え方そのものが変わったのです。 そういったわけで、私は疲れた足に出来る限りの力を込め、人っ子一人いない道の真ん中で、走り飛び跳ねました。

結論から言うと、私の目論見はまんまと成功致しました。 予想通

りと言いますか、予想外と言いますが、山々の風景はいかなる行動に対しても不变であり続けたのです。何でこんな不思議なことが起こっているんだろうと思つと同時に、私は唐突に理解しました。私は今、夢を見ているんだ。

そのことが分かると、途端に世界に変化が訪れました。私が、夢なんだつたら疲れ何て感じ無い筈だと意識すると、たちまち疲れはとび何キロでも歩ける力が湧きましたし、そもそも歩く必要すらなく空も飛べる筈だと思うと、たちまち身体は羽のように軽くなり、宙を自由に舞うことができるようになりました。何て楽しんだろう、何て自由なんだろう。私は、風を切るように風を感じながら雲一つない青い大空を自在に飛び回り、自宅を手指しました。

おそらく、この世界では、この夢の中では私が思ったことはなんでも叶えることができるのではないか。空を飛びながら私は、好きな飲み物を魔法のように出してみたり、今履いている革靴を欲しかったスニーカーに代えてみたりと色々なことを試し、そしてそのどれもが上手いくことを確認しました。やはり、この世界においては不可能は無いんだ。私はそう確信いたしました。

もう間もなく自宅に着く、だつという距離になつた頃、私は何気なく前方遠くに目をやりました。そしてそこで見たものに驚きを隠しえませんでした。一向に近づいて来なかつた、微動だにしていつかつた山々の風景が、先ほどとまったく1つも変わらない様子で目の前に広がっていました。私は夢の力を使ってどうにかその山々に近づこうといたしました。自身の飛行速度を電車並みの速度まで上げてみたり、山々が動いて近づいてくるよう意識してみたり、しかしそのどれを試してもついに山々に近づけることはありませんでした。

私は、この何でも出来る世界で、何故かどうにもならないものがあることに少し恐怖を覚えましたが、同時に何としてもどうにかしてやりたいという思いが内に芽生えました。そこで、どうすれば山々に近づくことができるのか、私はこれまでにないほど知恵を絞りました。

一つ案を出しました。あの風景は、進んでも進んでも一向に近づきませんが、それなら逆に離れてても離れても遠くならないものだと考えられます。そこから、あの風景は私と一定距離を保っているものと言えそうです。そして、一定距離を0に持つていければ目標を達成することができるわけです。そこで私が考えましたのは引き算によって距離を0にするのではなく、私の見ている夢の世界、その空間自体を圧縮していくという大胆なものでした。空間を限りなく圧縮することで、いざれ空間に存在する全てのものがたった1つの点に収束していくことになるわけです。そしてそのときこそが、一定距離が限りなく0になり、私が山々にたどり着ける瞬間なのではないかと考えたのでした。私は、自分らしかぬこの素晴らしい案を急速行動に移すことについたしました。さあ、今度こそたどりついてみせます。……。

その後、空間は瞬時に1点に収束し、そして、世界は消えてなくなりました。私もまた、押しつぶされ圧縮されて、無になつたのです。ただその間際、私は確かに、求めていた風景にたどりつけた気がいたしました。そこはとても、美しく神秘的で、でもどこか物悲しい気配の満ちた、私の心を表しているかのような場所でした。私は2度と、目を覚ますことはありませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5569m/>

点

2010年10月8日14時19分発行